



地域に伝わる伝統文化

秋保神社の神楽は、昔から自然との共存や地域の発展を願って舞われ続けてきました。

それぞれの舞の役柄やストーリーは、文献が残っておらず詳細は分かっていませんが、古くから伝わってきた舞を知る大先輩から学び、笛や太鼓の拍子や舞の所作の細かいところまで、昔のままに伝えています。

伝統芸能の担い手不足が深刻化している中にはありますが、ベテランと若手の世代がうまく融合し、地域の宝として大切に守り続けたいと思います。

これからも、時代に合わせてますます発展していくことでしょう。

秋保神社の神楽を通して、地域の歴史を感じていただけたら幸いです。



秋保神社神楽

大釜で沸かされる湯立て神事
使われる「湯」は、秋保温泉の源泉、「御湯」を用いることが古からの慣わしとされる。
霊験豊かなその呪法は、人々の邪気や災いを祓い清め、生命の活力とみち開きを祈念する。

いってみっぺ 秋保 秋保神社神楽

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市
連絡先：秋保総合支所総務課 (022-399-2111)
秋保市民センター (022-399-2316)

四百年以上守り伝えてきた秋保神社神楽
秋保に降臨する神々との出会い、
その歴史や風土、
人々の願いや祈りを感じながら、
厳かな湯立て神事で身を清める。

掲載されている情報は、令和4年3月現在のものです。

訪れてみたい秋保
二口街道ツアー 62

No.40

秋保神社神楽

この神楽は、慶長年間の発祥と云われ、四百年以上にわたり神社がある野中集落に伝わってきました。秋保神社はもと諏訪神社と呼ばれ、秋保郷の領主だった秋保氏の十五代盛房のときに本城の楯山城奪回を祈願して信州諏訪大社から勧請されたものですが、このとき随行してきた修験者らによってもたらされたと伝えられています。

その演目は、法印神楽の特徴を備え、神座を設けて場を清め、そこに神々を招き、その前で鈴や幣、剣や弓を持ち、足踏みを中心として鎮魂、祓い、清め、復活などを祈念する修験の呪法の名残が随所に見られます。


九月の例大祭では、仙台市内で唯一となる「湯立て」神事が催行され、大釜で沸かしたお湯を参観者に振りかけ一年の無病息災を祈念します。霊験豊かなこの演目は、古より二口街道を行き来する人々にも知られた名場面とも伝わります。

古式に習い一人て舞うことを基本にしている神楽は、代々の舞い手の所作が独特の趣を醸し出すとも云われます。長い歴史と山間の豊かな自然との暮らしの中で培われてきた人々の祈りや願いが、神楽師の舞いの中に感じることができれば幸いです。

民俗芸能の地を巡る 秋保神社神楽

- 法印神楽十二座
- 湯検座
 - 祝詞
 - 宮清
 - 四本幣
 - 四面切
 - 御幣招
 - 魔王
 - 神拝
 - 箭足
 - 小弓遊
 - 三本剣
 - 三足舞
- 「宮清」と「三足舞」については詳しい所作が分かっています。

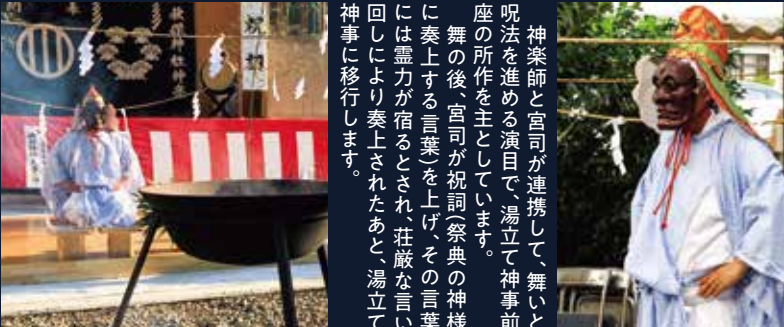
湯検座



老翁の相を現す厨面に烏兜をかぶり、千早神事に用いられる舞衣と袴姿の神楽師が、白の幣束と鈴を持って舞う。

湯立てに関連する祈祷の舞いと解され、神座としての場と参観者を祓い清め神事の「聖域」であることを位置づけ、神々の降臨を仰ぐ所作と思われれます。

祝詞



神楽師と宮司が連携して、舞いと呪法を進める演目で、湯立て神事前座の所作を主としています。

舞の後、宮司が祝詞(祭典の神様に奏する言葉)を上げ、その言葉には霊力が宿るとされ、荘厳な言い回しにより奏上されたあと、湯立て神事に移行します。

四本幣



腰に五色五本の幣束を付け、足踏みの呪法と幣束によって心身についた災厄などを除去・清める儀礼と解され、四本の幣束は舞いとともに四隅に放たれる場面がありその所作と思われれます。

熊野堂系の流れをくむと考えられ、幣束と霊験の呪法を主体とした舞いです。

四面切



熊髪をかぶり、タスキと指貫姿に太刀を持ち、後半は激しく振り回し、四方のしめ縄を斬る所作があります。

邪悪を踏み鎮め、天地運行の乱れを正し、万物の悪魔を退散させる法印神楽独特の呪法と思われれます。

御幣招



紫色の衣装の神楽師が山神様、赤い衣装の神楽師が水神様で、御幣束と鈴を振って舞います。

農民の暮らし、田畑に因んだ神々の所作が盛り込まれており、作物の五穀豊穡や病気除、諸難除を祈念した舞いと云われる舞いです。

魔王



熊髪に神楽面をつけ、後半は太刀と鈴を大きく振るいながら躍動的に舞います。

悪魔のために苦しむ人々を救い、災いをかすものを追っ払って安住の地を築くという舞と考えられ、大崎系の神楽では「摩訶」と称し、同系の流れとも解されています。

神拝



猿田彦の面をかぶって大口袴をはいた舞い手が、鉦で泥海をかき混ぜるようなしぐさがあります。

猿田彦は導きやみち開き、稲作の神とも云われ、交通安全の守護神としても奉られています。人々のみちをひらき、再生を祈念する演目と思われれます。

箭足




熊髪に神楽面をつけた神楽師が剣を持って舞う。

後半は二本の剣を両腕で大きく回す荒舞と呼ばれる場面、除魔の呪法が込められていると云う力強い舞です。

忠実で勇猛であった大和武尊に因んでいると解する人もおり、どんな劣勢でも機転を利かせて切り抜ける所作と云われています。

小弓遊



紫色の衣装の山神様と赤い衣装の水神様の神楽師が、弓を持って舞います。

諸方の山々と田畑を荒らす悪者や鳥獣、害虫などを退治し世の太平を祈る舞いです。

後半、天地に向けそれぞれが弓を放ちますが、弓矢の威力で悪魔を調伏する所作で、この矢を授けると開運の御神矢としての信仰があると伝わります。

三本剣



三人の神楽師が足揃えて邪を踏み破り、剣を持って、四方八方の邪神をなぎ払う演目です。法印神楽の最たる特徴を表わす剣を使った所作、複数人で祈祷する勇壮な舞です。

※法印神楽とは法印と呼ばれる修験者達によって行われていたことがその名の由来です。二間四方の舞台、獅子笛と太鼓にあわせて舞う郷土芸能として受け継がれてきました。

※修験とは、山岳信仰と仏教が融合して生まれた宗教で、山岳での修行により呪術を身につけた者(修験者)が、病氣や災難を除くために祈祷などを行っていました。

熊髪に神楽面をつけ、後半は太刀と鈴を大きく振るいながら躍動的に舞います。

悪魔のために苦しむ人々を救い、災いをかすものを追っ払って安住の地を築くという舞と考えられ、大崎系の神楽では「摩訶」と称し、同系の流れとも解されています。

二次元コードにアクセスすると、YouTubeでそれぞれの舞の様子をご覧いただけます。(動画提供: BULL DOG様)



① 野中は東西秋保の中心部

秋保神社のある野中は、東西秋保郷の中央部にあります。神社を中心に家々が立ち並んだ寺社集落的要素を持ち、二口街道と作並街道をつなぐ旧白沢街道との交通の要所でもあったことから、最初の村役場は、この野中界隈に置かれました。明治から昭和初期にかけて秋保の行政的な中心機能をもっていた歴史があります。

② 逆さ竹

二口山塊を生活の場としていた古代秋保郷の伝説の人物「磐司磐三郎」が、磐司岩の頂から長袋並木で悪行を為す鬼を退治するため弓を放った際、その矢が着地、刺さった場所で、そこから笹が生えたという伝説の竹林です。

かつて秋保神社例大祭で流鏝馬が奉納されていた時代も、この竹から矢を作るのが習わしとされます。神聖な竹として秋保神社とのかかわりが深く、無闇に採ると災いが降りかかるとも云われています。

③ 旧二口街道

南側に走る市道は、旧二口街道で、かつて秋保神社例大祭で行われていた流鏝馬は、この南の市道の直線路が会場、街道脇に多くの見物人を集めていたと伝わります。



お休み処

<h4>1 太田とうふ店</h4> <p>☎022-399-2707</p> 	<h4>2 Hygge Cafe Green Shoots</h4> <p>☎080-9256-4849</p> 	<h4>3 そば処 悠全</h4> <p>☎022-399-4034</p> 	<h4>4 おおた屋</h4> <p>☎070-2005-5711</p> 
---	--	--	---



秋保神社の発祥は、平安期坂上田村麻呂がこの地に熊野神社を祀ったことに始まると伝わります。その後中世に入って諏訪神社が勧請されるに至り、藩政時代にこれと合祀、以後諏訪神社として人々の崇敬を集め、武家の守護神として藩主の参詣も寄せられるようになりました。

明治になり秋保郷の総社として位置づけられ、社名を秋保神社に改めて今に至っています。

☎022-399-2208

神楽が奉納されるのは1月のどんと祭と9月の例大祭です。

年中行事

一月	元旦祭 どんと祭
二月	節分祭 紀元祭 新年祭
五月	御田植祭
六月	夏越大祓
九月	例大祭
十一月	新嘗祭
十二月	年越大祓

新築された和楽殿

